

自分自身に“NO”を出さない。



大谷中学・高等学校を卒業した先輩たちが学生時代を振り返りながら、ここで得た気づきや現在の自分に息づくもの、未来へのヒントについて語るインタビュー企画。

第四回は、京都本大賞を受賞した『ニーチェが京都にやってきて17歳の私に哲学のこと教えてくれた。』や、哲学者の格言に触れる『まいにち哲学』、ドラマ化もされた『ぴぷる』など、哲学をテーマにした本を数多く出版し、マンガ原作者としても幅広く活躍する原田 まりるさん。後編では、哲学を応用した悩みへの対処法や、自分自身との向き合い方についてお話しいただきました。

感情を細分化して、視野を広げる。



「自分と違う価値観に触れることで、悩みは客観視できる。そんな逃げ場を作っておくことも大事だと思います。」（原田さん）

——最近、感情を一言で片づけてしまうことが多いですね。実際にはもっと多様な思いがあるはずなのに、それを表現できずモヤモヤを抱えている人も多いと思います。そんな人たちに、何かアドバイスできることはありますか？

原田 そういう場面で感情を細分化することは、とても大事ですね。あとは、自分にNOを出さないことや、近視眼的に物事を捉えないことも。常識や周囲の目を理由に、自分のやりたいことを封じ込めてしまうのはもったいないですから。ドイツの哲学者・ショーペンハウアーの「人生は粗いモザイク画のようなものである」という言葉がありますが、近くで見ると乱雑な絵でも、離れて見れば美しい。最終的に俯瞰で見えて整っていれば、それでいいと私は思います。

——悩みの渦中ではわからなくても、少し引いて見れば違う風景が見えてくる。

原田 そうですね。例えば学校でも仕事場でもこの先の進路でも、「ここしかない」と思うなら、あえてすべてを捨てた場合の生き方を想像してみるのもいいと思います。実際に行動に移さなくても、「別の可能性がある」と思えるだけで視野は広がりますよね。私は、もうすべてがしんどくて何もできなくなるようなことあれば、一旦バンコクに飛ぼうと決めています。まだ一度も行ったことはないんですけどね(笑)。でも、それくらい極端な発想でロードマップを描いてみるのが、自分に残された可能性を確認する練習にもなる。「人は自分の持っている自由は行わずに、自分の持っていない自由を欲しがる」キルケゴールの言葉ですが、よくこの言葉を思い出すようにしています。

簡単な答えで問いを終わらせないこと。



——今回、大谷中学・高等学校の150周年のテーマが「樹心(じゅしん)」で、そのキャッチフレーズとして「問い、気づく。問い、築く。」という言葉があります。この言葉を聞いてどんなことを感じますか？

原田 自分で問いを立てて、その問いから何かを築いていくということですね。それは、自分らしい人生を構築する上でとても大事なことだと思います。

——とは言え、問いを立てることは意外と難しい作業でもありますよね。原田さんはどうやってその問いに気づいてきたんでしょうか。

原田 「なぜ？」を繰り返すことですね。例えば、今勉強をしている、それはなぜか——大学に行くため。では、なぜ大学に行くのか——さらにその先は？ というふうに、なんで？なんで？を繰り返していく。その過程で、答えに詰まる瞬間が出てくるんです。でもそこで「まあ、そういうものだから」と、終わらせないことが大事だと思います。



「職員室にあんなにたくさん生徒がいる学校って珍しいですよ」と原田さん。その風景は当時も今も変わっていない。

——ソクラテス的な問答ですね。

原田 まさにそうですね。高校生のときにそこまでやっていたかは覚えていませんが、今でも「なぜ？」を紙に書き出すことはよくあります。あとは、「なんか嫌だな」と感じたときも、自分自身に問い返して「なぜそう思ったのか」をもう一度推敲してみるんです。逆説を立てたり、疑ってみたり……そういうことはずっと続けていますね。

——そういった思考の積み重ねを続けても、原田さんはとてもポジティブな印象です。それはやはり、哲学と付き合ってきたおかげなのでしょう？ 著書の中にも「哲学は、頭は重くなるけれど心は軽くなる」という言葉がありましたよね。

原田 そうかもしれませんね。あとはやっぱり、高校時代に小論文を書いて職員室へ持っていくと、先生が集まって盛り上がってくれた経験が大きかったと思います。自分の表現を通じて誰かが笑ってくれたり、おもしろいねと反応してくれたりする。そうすると、自分のキャラクターや役割が生まれていくんですよね。まあ、単純に関西人だからというのもあるかもしれませんが(笑)。失敗や挫折をシリアスに考えすぎる必要はない、いつか武勇伝にして笑いをとるか～！くらいの気持ちで捉えるようにしています。人生は先にしか進めないですからね。

悩みを抱える人に、“表現”のすすめ。



「もっとぴったりのものや場所、まだ知らない何かがあるんじゃないか」と話す原田さんの問いはこれからも続いていく。

原田 もう一つ、これは高校時代の出来事というよりその後の話なのですが、20代で体調を崩して、芸能活動をやめて、これからどうしようかなと迷っていた時期に、スキー部のOB・OGの集まりに参加したことがありました。そこで私の元気がないことに気づいたある先輩が、「原田、お前はあの練習をこなしたんだから、何があっても乗り越えられるよ」と言ってくれたんです。その言葉は今も心に残っていて、支えになっています。

——やはり、高校時代のさまざまな経験が今につながっているんですね。今、大谷中学・高等学校に通う生徒のみなさんも多様な悩みを抱えていると思います。人との関係性や、はっきりとした理由がなくても、どこかに孤独感を感じていたり。原田さんだったらどんな言葉をかけますか？

原田 私自身にも、そういう時期がありました。でも、自分の考えていることを表現して、それに共鳴してもらえる場があったことに救われました。文章を書いて、それを認めてもらえたとき、「自分の存在そのものが受け入れられた」と感じられて、本当にうれしかったです。表現することと、自分のコアは密接に結びついている。もちろんそのための練習は必要かもしれませんが、勇気を出して表現することはとても意味があることだし、ぜひ挑戦してほしいと思います。

——大谷はそういう挑戦を受け止めてくれる学校でもありますよね。それでも一歩を踏み出すのは難しい。だからこそ、原田さんの言葉が背中を押すきっかけになったのではないかと思います。

原田 そうだといいいのですが。とりあえず、自分にNOを出さないこと。それが一番大事だと思います。「こんなことを思っちゃダメなんじゃないか」「こんなふうを考える自分はダメな人間なんじゃないか」、そうやってつい自分を責める気持ちが出てきてしまうのですが、そういう気持ちを否定する必要はないと思います。それでも大丈夫だから、“そう思った自分”をまずは許容してあげてほしいです。



<PROFILE>

原田まりる **Mariru Harada**

京都府生まれ。大谷高等学校を卒業後、芸能活動を経て2014年より作家として活動をスタート。現在はウェブトゥーンやアニメーション原作なども数多く手掛ける。著書に、京都本大賞を受賞した『ニーチェが京都にやってきて17歳の私に哲学のこと教えてくれた。』（2016年ダイヤモンド社）、『まいにち哲学』（2017年ポプラ社）『ぴぷる』（2019年KADOKAWA）など。

Interview & Text: Asako Saimura

Photo: Ayumi Yamamoto